



旧制一高の校長を務め、東京女子大の初代学長ともなった新渡戸稲造。そして新渡戸に強い感化を受け、戦後の東大総長を務め、旧教育基本法の策定にもかかわった南原繁。

多くの人材を育てた2人の偉大な教育者の精神を受け継ぎ、次世代に伝えてきた人に贈られる新渡戸・南原賞の第7回授賞式が先ごろ、秋山記念生命科学振興財団の主催で行われた。

今年の受賞者は三島徳三・北大名誉教授と、加藤節・成蹊学園専務理事だ。

三島さんは、新渡戸夫妻の「遠友夜学校」の意義を語り継いできた。この学校は、貧しい家庭の子どもたちに教育の機会を与えようと、札幌農学校の教授だった新渡戸が1894（明治27）年に札幌

に創設、1944（昭和19）年に閉鎖に追い込まれるまで続いた。

「教えたい」教師と「学びたい」生徒の白熱した交錯が50年の歴史を貫いていた、という三島さんは、現代の教育に示唆するものが少なくない、という。

加藤さんは南原の孫弟子に当たり、現在は南原繁研究会の代表を務める。南原は戦後、全面講和を主張して吉田茂首相に「曲学阿世の徒」といわれた。「現実の政治と哲学がぶつかったときに理念を優先させた。学者として名誉なこと」とし、「私もそういわれたい」と述べた。

今こそ2人の先達に学ぶとき、と改めて感じる。3日午後、東京・神田の学士会館でシンポジウム「南原繁と日本国憲法」が開かれる。